

仮説であるが、一つは、専門職と宗教者が互いに連携した経験が少ない、ということがあろう。専門職にとっては、政教分離の原則や、布教の疑義があると宗教者を現場に入れられない。被災者も公共空間で宗教者に会うことに慣れていない。

宗教者にとって公共空間は自分のホームではないので、アウェイ状態では自信を持って振る舞うことが難しい。もう一つは、宗教者によるケアとして、スピリチュアルケアや宗教的ケアの意義が共有されていない、ということがあろう。ターミナルケアに関心を持つ者を除いて、ほとんどの専門職は、宗教者によるケアをイメージできないし、効果を実証したエビデンスも乏しい。宗教者との関わりを「ケア」という言葉で意識した被災者は少ないのではないだろうか。そして、宗教者も「ケア」という言葉に親しんでいない。実際には普段からスピリチュアルケアや宗教的ケアを実践しているはずなのだが。

このように考えると、①政教分離の壁、②布教の疑義、③経験不足、④ケアの意義が不明確、⑤「ケア」という言葉の壁、という課題が見えてくる。②は「超宗教」の体制や倫理綱領の提示で、③は実際の経験で、④は研究成果によって、⑤は「郷に入れば郷に従え」という意識を持てば、ある程度カバーできる。②⑤の積み重ねが、①の壁を越えるための助走になるだろう。

パネルの主旨とまとめ

高橋 原

本パネルは東日本大震災後の状況を踏まえて東北大学に開設

された実践宗教学寄附講座における「臨床宗教師」養成のプロジェクトに関わる当事者達によって、宗教者が公共空間において心のケアを行なう際の課題と可能性を論じるために企画されたものである。

高橋原は、従来なされてきたスピリチュアルケアとの区別に基づいて宗教的ケアの諸特徴を指摘した。被災地等における諸事例を紹介し、人々が悲嘆に直面する現場において公共的な宗教者が求められていると問題提起を行なった。小西達也は、自身の体験に基づいて米国の病院チャプレンの実情を概観し、自身と異なる宗教・宗派の人々のニーズに応える公共空間での宗教的ケアの必要条件を検討した。森田敬史は、ビハラー僧としての実践経験に基づいて、患者や家族の視点やボランティア僧侶との連携も含めて、医療現場における宗教的ケアのあり方について考察した。谷山洋三は、超宗教・超宗派で行なってきた被災地での実践経験に基づき、宗教者が提供するスピリチュアルケア、宗教的ケアの諸課題を具体的に検討しながら、臨床宗教師の可能性と課題について考察した。鈴木岩弓は以上を受けて、臨床宗教師が構想されるに至った経緯を「実践宗教学寄附講座前史」と題して報告し、コメントとした。

フロアからの質問の一部を紹介する。隣接領域の専門家と比較しての臨床宗教師の専門性はどこにあるのか。臨床宗教師になり得る人材が大教団所属の宗教者に偏っているのではないのか。中立性への配慮があるとしても医療的アプローチにはない宗教性を打ち出すためには宗教的言葉を積極的に用いるべきではないか。医療現場においては西洋近代医学の世界観が前提と

されているが、諸宗教の多様な差異を捨象すると、既存の価値観を覆すような宗教本来のエネルギーが失われるのではない。宗教者ではない素人が臨床宗教師となることはあり得るのか。死後の世界を語ることこそが宗教者固有の役割であり、この要素は臨床宗教師に欠いて欲しくない。

パネリストの応答は次のようなものであった。遺体との対面など典型的場面での活動で宗教者の専門性が発揮される。他宗教との学び合いという経験を踏まえて現場に出るところに特徴があるが、仏教とキリスト教以外の宗教間の協力の形は未知数の部分が多く研究課題である。人間同士の信頼関係構築が第一に必要であり、その上で宗教的用語が有意義なものとなり得る。現場では宗教とそうでないもののグレーゾーンも含めて仏教であるという関わり方をしてきた。医療現場では誰のために行なうのかという基本が大前提であるが、そこから被災地の現実を踏まえて既存のものを超える可能性も開かれるのではない。公共的な場では宗教的ケアは「浅い」ものに留まらざるを得ない面はある。それを超える部分は大切だが、私的な関わりの中で展開されるのではない。現場の活動と教理や理念のぶつかり合いは必ずあり、両者が切磋琢磨し合うことが必要である。米国でチャプレンになるためには指定された宗教組織に所属しなければならないが例外もあり、日本への応用について多角的な検討が必要である。チャプレン等の役割が死の問題を焦点に当てすぎてきたので、むしろそれに限定されない活動の可能性を考えるべきではないか。

最後に鈴木岩弓より、病院や福祉施設などさまざまな施設に

「臨床宗教師」がいるようになり、宗教の位置づけが変化していくようになるという展望が語られてパネルが締めくくられた。ここに紹介できなかったものも含め、多くの有意義なコメントや質問があり、活発な議論が展開され、有意義なパネルとなったと考える。

東日本大震災後における〈いわき市〉と宗教

代表者・司会 寺田喜朗
コメンテータ 對馬路人

地域構造と宗教分布

——被災・避難地域と新旧宗教の立地——

星野 壮

本発表は、後に続く三つの発表を各論とするならば、総論の位置を占めるものである。

いわき市は東北第二の人口（三十三万人余）を誇る福島県浜通り地方の中核都市である。一九六六年、平・磐城・勿来・常磐・内郷の五市、四倉・遠野・小川・久ノ浜の四町、好間・川前・大久・田人・三和の五村が合併して現在のいわき市は誕生した（当時は全国最大面積を誇る市であった）。このような合併の結果として、いわき市は非常に広域であり、地域の核となる箇所が市内各地に存在している。たとえば平は市の中央であ